

古代北方農耕文化の源流

北海道大学文学部教授 吉崎昌一

私の研究テーマの一つである今日の話題に関する分野は、まだ未完成でありまして、うまくまとめてお話できるかどうか自信がありません。その点はお許し下さい。タイトルにあるような「源流」についてもふれたいのですが、日本とアジア大陸側の考古学的な編年のタイム・スケールから異なっていて、両地域の正確な比較はまだ困難です。それに資料が少ない。農耕に使用する機具類についての研究はありますが、肝心の栽培植物についてはなかなかよい情報が集まりません。例えば、これだけ研究精度の高い日本列島の弥生文化の遺跡報告をみても、栽培されていた植物に関する情報が極端に少ない。とくにコメ以外の正確な情報は数えるくらいしか無いのが実情です。

それで、今回は最近判明しはじめた東日本の栽培植物について紹介し、その立場から日本に隣接する大陸側の研究に何を期待するか・・・といった形で話を展開してみたいと考えています。

植物栽培あるいは農耕が日本列島においてどのように開始され発展したのか、ということは考古学の研究者だけではなく、民族学や育種学の分野の方々からもいろいろな意見が出されております。しかし、本日は主として考古学の立場から議論を進めましょう。

一般的に縄文時代は、12000年～12500年前に開始したといわれています。その当初から新石器時代として認められるかどうかはわかりませんが、大型の集落址や多数の墓地群などが出現し、比較的安定した生活が各地で始まったのは縄文時代前期の頃からだと思います。現在までの資料では、丁度この頃から明らかな栽培植物のコンプレクスが知られています。はじめの頃はマメの種類やソバあるいはヒョウタンなどですが、新しくなるにつれて種類が増加していきらしい。しかし日本の指導的な考古学者たちは、こうした栽培植物の存在は認めても、縄文時代は社会的に農耕文化の段階でなかったと説明します。ある考古学者は縄文時代には栽培植物らしきものはあるが、農耕はない・・・、農耕はあっては困る、とさえいっています。確かにそのような見解も、一つの優れた歴史観ではありましょう。しかしながら、まだまだ出土資料が少な過ぎて、そんな議論ができるような段

階にない、とも言えるかもしれません。

では、誰もが文句を言わない、一般的に認められる農耕はいつから始まるのかといいますと、西暦紀元前300～400年前の事だといわれます。その頃に西日本の一部に水田耕作技術が現れ、それが日本の最初の農耕文化だと規定されます。この農耕は社会的に大きな変動をもたらし、その結果、社会構造が変わってしまう。つまり、これが日本における農耕社会の誕生で、それ以前は農耕社会ではないと説明するのです。でも、今回はそうした社会構造などの問題は一切はずし、前にもいった通り、栽培植物がいつ現れ、それをめぐってどんな問題が考えられているかについてだけ紹介していきましょう。

まず、縄文時代をとりあげます。この段階はこれまで純粋な採集狩猟民の段階だといわれていました。しかし、この考えはこの10数年前から資料的に変化してきています。どうもわずかながら栽培植物の存在があるらしい。問題はそれらと人間の関わりの度合いでしょう。

縄文時代から栽培植物が存在していたのではないかという考え方は、けっして新しい発想ではありません。1920年代には、すでに何人かの研究者によって述べられていますし、1927年になると大山柏氏が神奈川県の縄文時代中期の代表的な遺跡である勝坂遺跡を発掘し、その報告の中で打製石斧が原始的な農耕器具ではないか、と指摘しています。しかし、栽培植物そのものの検出はずっと遅い。1940年に甲野勇氏が縄文時代晩期に属する埼玉県真福寺泥炭層遺跡を発掘し、そこからヒョウタン・マメ・ゴマ・ソバなどを検出されましたが、これなどが最もはやい発見でしょう。この発見はもっと重要視されてよかったと考えられるのですが、混入ではないかと疑問視され、忘れ去られていきます。

ところが1970年後半から栽培植物そのものの検出に関しては、情勢が急転回していきます。たとえば、福井県教育委員会若狭歴史資料館の森川昌和氏らをはじめ多数の考古学者や関連領域の研究者が協力して発掘した福井県鳥浜貝塚では、縄文時代前期の層準からヒョウタン・マメ・ウリ・エゴマなどが検出されました。最初、ヒョウタンは海流で漂着したもので、人間が意図的に持ち込んだものではないという意見もでましたが、その後あちらこちらで断片的に検出されはじめ、1990年になると滋賀県琵琶湖の湖底で発見された縄文時代早期～前期のかけの粟津貝塚などからも出土しはじめました。これは奈良国立文化財研究所の松井章氏が発掘を担当したもので、もう人間が意図的に持ち込み栽培した事は間違いない。問題はマメです。粟津からも出土していますし、前に述べた鳥浜からも見つかっている。岐阜県のツルネ遺跡など各地からマメが報告されているのですが、頭の痛

い資料です。どうしてかといえば、マメの同定はきわめて難しい。最近少し詳しくマメを眺めているのですが、なかなか同定の基準となる部位を捕まえるのが難しく、種分類が判然としないのです。考古学関係の方は簡単に緑豆といわれるのですが、本当でしょうか・・・高知大学農学部でマメを専門に研究されている前田和美氏は、出土した資料の中のあるものは、限りなく緑豆に近いと発言されていますが、それほど難しいのです。あるものはアズキの原始的なものかもしれない。アズキの起源についてはまだわかっていないように思います。それも大きな問題でしょう。もしも出土している炭化マメのあるグループが緑豆かアズキである事が確定すれば、縄文人は早期の段階から農耕を持っていた事になりますし、雑穀の一つであるマメの食料としての重要性ももっと検討しなくてはなりません。半栽培段階だの原初的農耕だなどといっておられなくなる可能性すら含まれているからです。でも正直に言います、出土資料のマメを拝見した限りでは、野生種というよりは栽培種といたくなるのですが、いかんせん資料が少な過ぎます。決定にはまだ多少時間がかかるでしょう。

国立奈良文化財研究所の松井章氏に伺ったところでは、琵琶湖底の粟津貝塚の所見でもう一つ面白い事があります。それはここから非常に大きなクリが出土している、という事です。このサイズのクリは普通状態の野生のクリにはないのだそうです。こうした現象はほかのいくつかの遺跡でも観察されています。いろいろな野生のクリを調べている研究者から聞いても、とても野生とは思えない大きさであるとの事です。それで縄文人は彼らの集落の周囲の特定のクリの木を選んで管理していたのではないか、という意見が出されています。つまり中尾佐助氏の言う半栽培の状態ではないのか・・・という事です。じつは、クリが縄文人によって管理されていた可能性については、ずっと以前に東大の人類学教室におられた酒詰仲男氏が注目していました。その後もいろいろな考古学者が主張されています。慶応大学名誉教授江坂輝弥氏もその一人です。最近では北海道開拓記念館の学芸員をされている山田悟郎氏が、北海道の縄文時代遺跡におけるクリの出現を追跡して、その層準から検出される花粉の組成中に、クリが本来植生上で伴う筈の他の種類の植物花粉がほとんど無い事に注目し、北海道のクリは縄文時代人が本州から選択的に運んで来て、集落の周辺に植えた可能性がある」と指摘しています。私もこの考えには賛成です。おそらく縄文時代の人間はかなり古い時代からこんな形で自分たちが有用と考える植物を積極的に利用している。その成育にも手を貸している状態が普通であったとさえ言えるのではないのでしょうか・・・野生から栽培まで、その間にはいろいろな段階があり、ある考古学者のい

うように社会との関係でスパッと割り切れるものではないように思います。

縄文人がすでに植物管理をおこなっていた事を前提に、次にご紹介したいのは縄文時代の雑穀類、つまり、はっきり言いますと栽培植物の問題があります。北海道の南西部、津軽海峡にほど近く南茅部町がありますが、ここは大規模な縄文時代前期から中期にかけての遺跡がいくつか発掘されています。その一つ、縄文時代前期後半の遺物を出土したハマナス野遺跡第27号竪穴住居を埋積した地層の中から、トロント大学の人類学部で古民族学植物学を研究しているG・クロフォード氏と地元の教育委員会の考古学研究者によって、たった1点ですが炭化したソバの種子が検出されています。これは明らかな栽培型のもので、出土状況も確実なものです(第1図)。最近、縄文時代前期の層準からソバの花粉の検出されるケースが報告されていますが、実物の炭化種子はこれが最初でしょう。ごく最近ですが、花粉分析の専門家に伺ったところ、走査型電子顕微鏡を利用すれば栽培型のソバの花粉は他のものと区別する事が可能だそうです。ですから、更新世以来の野生種と混同して考慮する必要は全く無い。ソバが縄文時代のかかなり古いステージから存在していた事は、ほぼ確かだと思います。ハマナスの遺跡からは、このほかにも奇妙な種子が発見されています。それはイネ科の種子で、イヌビエに類したものなのですが、どうも現在のイヌビエより若干サイズが大きい。隣接する臼尻B遺跡は縄文時代中期のものですが、その竪穴住居から出土する同じようなイヌビエ類似の種子になると、サイズはもっと大きくなります。でも、種子の形態は、かつて東北その他で栽培されていた栽培型のヒエとは少し異なっているのです。私たちとG・クロフォード氏は、このタイプのヒエを縄文ヒエと仮称しているのですが、それらはひょっとすると野生のイヌビエに人が関与した・・・管理した結果、栽培に進む過程のものであるかもしれない、と考えております。臼尻B遺跡では、ほかにアワと見てよいものが検出されているのですが、その資料は残念ながら穎と胚の部分がすでに剥落していて特有の細胞が観察できない。しかし、形態から見るかぎりアワである可能性は十分でしょう。縄文ヒエについていえば、他の縄文時代前期～中期の遺跡、例えば余市郡余市町のフゴッペ貝塚などからも似たような種子が検出されていて、ヒトの関与したらしいこのタイプのイネ科種子の存在は、どうも偶然の産物とは考えられない。大阪大学におられたヒエの専門家の藪野友三郎博士は、日本の栽培ヒエは東北アジアのどこかで栽培化されたものであると言っておられますし、京都大学の農学部で栽培植物、とくに雑穀類の遺伝的な研究をされている阪本寧男博士は、ヒエが栽培化されたのは東日本である可能性を指摘されているのです。きわめて示唆的ではありませんか・・・こうした背景

の下に、ここで紹介したような資料を検討すると、東日本のある地域においては、どうも縄文時代前期頃からヒエ・ソバ・マメなどの雑穀類がちらつきます。さらに、中期になるとアワが顔を出すかもしれない。縄文時代人の食料の中での位置づけは明確ではありませんが、地域によってはこれらの食料を考へても良いのではないかと、少なくとも補完的な食料の中にそうしたものが採用され始められているのではないかと思います。

つけ加えておきますが、確実な現生タイプのヒエが明らかに認められるのは、もっとずっと新しい時期で、私の手元にある資料では青森県八戸市八幡遺跡のものが一番古い。これは伴出している土器から縄文時代直後としてよいでしょう。それより古い東北地方の縄文時代遺跡の調査には、まだ手を染めておりません。かつてのヒエの本場で、ヒエそのものの変異の多い東北地方でこれが栽培化されたとすれば、話はうまく合いそうです。だとすれば東北地方のヒエの栽培化はもっと古くなる可能性がありそうです。北海道で検出された縄文ヒエは、東北地方で古くから始まっていたヒエの栽培化の初期のものが、その地の中核的な縄文文化の円筒式土器の渡島半島への流入と共にあらわれた散発的な影響の一部なのではないでしょうか。すくなくとも、北海道においては、縄文ヒエを除けば、現生タイプのヒエの出現はあまり古くならない、西暦10世紀頃からは明瞭な形で現れてこない。八幡遺跡のデータで考えるかぎり、現生栽培型のヒエは、その頃に東北から北海道に伝えられたのではないのでしょうか。エゾ地においてヒエはきわめて古くから存在したというイメージがあるのですが、どうもちょっと違うようです。この点には注目しておく必要があるかと考えます。

次に弥生時代として一括されている段階の事を紹介しましょう。これまでは西暦前350年くらいに西北九州などに水稻耕作が出現し、それ以降日本列島の大部分の地域においては縄文文化は弥生文化と名づけられる農耕文化に転換したと説明されてきました。さらに、もっとも初期といわれる弥生時代の水田は、技術的にも高度なもので、その事からもこの農耕技術はとて縄文文化の中から徐々に発展したものではなく、明らかに渡来文化が基礎になって形成されたと説明されています。その後調査が進み、西日本では縄文時代晩期後半の頃からそうした水田の出現する事が明らかになってきました。縄文水田あるいは弥生0期という名称や段階が設けられた背景です。確かにこの頃から、かなりの量の間人集団が大陸アジアから次々と移動してきた事は、弥生時代の人骨の研究や現代日本人の変異の研究から間違いない。こうした人間の移動は、日本列島に新しい技術や栽培植物をもた

らした事でしょう。金属器・機織などもその一つだと思います。しかし、最近のデータをみると、コメの流入一つをとっても、そんなに簡単でなかった事が伺えるようになってきたのです。これまでは、西日本の一部に出現した水田耕作の技術が、ある時間経過を示しながら北日本に広がっていく。水田耕作－弥生文化の拡散はそうとらえられてきていました。また青森県や北海道には水稲耕作は伝わらなかった、とも言われていたのです。ところが2年ほど前に実施された調査で、青森県の津軽平野では縄文時代の直後から水田の営まれていたケースのある事が判明しました。年代にして西暦紀元前2～300年の頃でしょうか・・・、縄文時代直後の土器形式の標準遺跡として著名な砂沢遺跡がその例です。水田址の発見例ではありませんが、現在、私は八戸市教育委員会が発掘した砂沢遺跡とほぼ同じ時期の八幡遺跡の竪穴住居から出土した炭化種子を調べております。この住居からは、コメはもちろんの事、オオムギ・コムギ・アワ・ヒエ・キビなどが出土しているのです。こうした資料を見ると、日本列島における農耕文化の開始や栽培植物の流入経過には、もう少し複雑な状況が隠されているのではないかと考えた方が良いでしょう。オオムギなどは、縄文時代後期からの報告例もありますし、キビの存在も気になります。こうした雑穀類が、弥生時代もしくはその直前に始まった水稲農耕技術の渡来と軌を一にして、導入されたのかどうか再検討の余地があるのではないのでしょうか・・・。コメとてそう簡単には片づかないようです。たとえば、これも八戸市教育委員会の調査した例ですが、青森県風張遺跡の縄文時代後期末の竪穴住居の柱穴底部からコメが検出されています。この種子分析の仕事は、教育委員会の依頼で私の研究室に来ていたトロント大学のキャサリーン・ダンドレア君がおこなったもので、同じ遺跡の別の竪穴住居からも同様な検出例があり、東北地方の縄文時代後期のコメの存在はまず間違いないでしょう。東北地方の縄文時代後期後半にすでにコメが知られていた。この文化的意義は大きい。最近、岡山県でも同じような状況が発生しています。岡山県立博物館の高橋護氏は、この地方の縄文後期の土器片の中に糊痕のついているものが存在している事を発見しました。九州地方では縄文時代晩期から、瀬戸内は少なくとも後期に、東北も同様にコメを知っている証拠が挙がりつつある訳です。こうしたコメが弥生時代のコメにつながるかどうか、あるいは日本列島のこの時代の住民の中に、どの程度の普遍性を持って広がっていたのかはまだ分かりません。しかし重要な事は、もしコメが入っていたとすれば、それはコメだけの問題ではないのです。ほかにもそれと一緒に入ってきたものがある訳ですし、栽培植物だっていくつかの組み合わせで取り入れられたに違いない。

つぎに、これまではあまり知られていなかった北海道の古代の農耕について紹介をしましょう。北海道で発掘の際に栽培植物が発見されたのは太平洋戦争後です。天塩管内の豊富という所で札幌の高校生が平安時代の竪穴住居を調査、大量の鉄製品と共にマメとソバがかたまって出土しました。この資料は現在旭川市立郷土博物館に保管されています。最近、このソバを開拓記念館の山田悟郎氏と私のところの樺坂恭代氏が共同で調べ直しました。その結果、これまでソバと思われていたものはなんとベニバナと判明したのです。それからもう一つ、十勝川河口近くに若月という遺跡があります。これも平安時代のもので、浦幌町の後藤さんが発掘しました。火災になった非常に保存の良い竪穴住居ですが、その中からオオムギやソバが甕に入れられたまま横倒しになって、口から床の上に大量のこぼれた状態で発見されています。エゴマも発見されました。出土状況から推定すれば、住居が火災になったためにヒトが慌てふためいて飛び出し、その際にカメがひっくり返ったような有様なのです。北海道で、このような遺物の出土状態が確認されているにもかかわらず、この地域の古代住民が農耕を積極的におこなっていたとは、なかなか考えが及ばない。北海道は、縄文時代以来ずっと採集狩猟の段階で、それがアイヌ民族まで続いていた、というのがこれまでの常識でしょう。

世界的にも有名なアイヌ民族の生活に関する民族学研究書に、渡辺仁氏の書かれた *The Ainu Ecosystem* (東京大学1972) という優れた論文があります。世界中の民族学者によく読まれており、どの国の研究者と話しても渡辺先生のこの文献についてふれ、アイヌ民族は採集狩猟民であった事が自明と語っているのです。しかし、前にも話したように 最近の考古学的な資料から見ると、どうしてもアイヌ民族はかなりの農耕をおこなっていて、しかも石器時代の段階から連続して本州文化の影響をうけ続けている。奈良・平安時代には農耕技術や栽培植物あるいは金属器で、さらに後の時代には経済的なネットワークの中で本州と密接に結びつけられていたのです。つまり、北海道のどの地域をとっても、本州の文化からフリーであった時期は無いのです。縄文時代以来そんな段階は皆無であったと考えざるを得なくなってきています。縄文時代住民の後裔であるアイヌ民族の先祖は、古代のある段階にほとんどの地域で農耕文化の段階に突入し、それが近世和人の侵入や圧迫で農耕的生活が激減させられた、と考える方が説明しやすいのです。こうした仮説のためにももう少し資料をお目にかけてみたいと思います。

北海道の時代区分は本州とは若干異なっています。大まかにいって縄文時代は同様に、本州が弥生時代になると北海道中央部から南西部にかけての地域は、きわめて弥生文化の様相の濃い多少独自の文化が広がります。恵山文化がこれです。北海道の東部・北部の地域には縄文文化のライフスタイルを強く残す続縄文文化が存在する。この考え方は、まだ研究者の共通理解にはなっていません。いずれ詳しく報告する事になるでしょうが、今回は残念ながら説明の時間がありません。西暦6世紀後半頃から、北海道の文化は急速に変化し、本州の土師的な色彩が強くなって参ります。住居も一隅にカマドを持つ土師タイプのものになります。この段階の文化を通常は擦文文化・擦文時代とよんでいます。形質人類学的な研究資料からすれば、このヒトの集団は明らかに現在のアイヌにつながると考えられます。擦文文化は、本州でいえば奈良・平安期と理解しておいて下さい。この文化の終末の時期は、どんなに新しくても鎌倉時代初期まででしょう。これまでの調査で、擦文時代の遺物が陶磁器を伴ったケースは全く無い事も、その傍証といえると思います。

こうした擦文時代の住居の発掘を実施する時に、攪乱をうけていない住居の床面の土壌を採集し、それを乾燥した後に浮遊洗浄装置(フローテーション法)で処理します。単に水洗するのではなくて、水の中でかき回し、水面に浮かんでくる炭化植物片を採集するのです。その資料を乾燥してから顕微鏡の下で選別するとたくさんの植物種子が検出できるのです。この作業を積極的に実施した遺跡からは、栽培植物が検出できなかった例はまずありません。それもかなりの量が出土する事が判明してきました。採集された炭化種子の大部分は、双眼実体顕微鏡のレベルで同定が可能なのですが、場合によっては走査型電子顕微鏡を使用しています。こうして分類された栽培植物種子をお目にかけてみましょう(図)。これまで判明している擦文時代の栽培植物としてはアワ・キビ・オオムギ・コムギ・マメ・ウリ・コメなどが出土していますし、それ以外にもベニバナやヒメニラの球根など人間が利用可能なものが検出されます。不思議な事に竪穴住居の中や集落のたき火跡などから検出される炭化種子の種類をみると利用不可能なものがほとんど出土しない。調理に関係するものは炭化する機会が多いから、よりよく保存されているのでしょうか、面白い事実だといえましょう。このようにして収集された遺跡ごとの炭化植物種子-栽培植物種子の組み合わせを、私たちはシード・コンプレクスとして扱います。シード・コンプレクスは遺跡によってかなり異なります。ある遺跡からはムギの仲間が見つかりませんが、コメはどこでもきわめて少量です。むしろ発見されない場合の方が多い。おそらく、コメは現地で生産されたものではないのでしょうか。まだ十分な調査が実施されたとは言い難い

白尻B遺跡：北海道 茅部郡 南茅部町 字 白尻

小笠原忠久(1988)；白尻B遺跡 Vol.8 北海道南茅部町教育委員会

フゴッペ貝塚：北海道 余市郡 余市町 栄町 フゴッペ

吉崎昌一(1991)；フゴッペ貝塚から出土した植物遺体とヒエ属種子についての諸問題
北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第72集 フゴッペ貝塚所収

八幡遺跡：青森県 八戸市 大字 八幡 字 館ノ下

吉崎昌一(1992)；青森県八幡遺跡12号住居から検出された雑穀類とコメほかの植物種子
八幡遺跡発掘調査報告書 II (平成4年)．八戸市埋蔵文化財調査報告書 第47集
八戸市教育委員会

十勝太若月遺跡：北海道 十勝郡 浦幌町 字 下浦幌 東5線

石橋次雄・木村方一・後藤秀彦(1974)；十勝太若月．浦幌町教育委員会

サクシュコトニ川遺跡：北海道 札幌市 北区北17条西13丁目 北海道大学構内

北海道大学埋蔵文化財調査室(1986)；サクシュコトニ川遺跡．北海道大学

柏木川11遺跡：北海道 恵庭市 柏木川

吉崎昌一(1990)；北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体．北海道恵庭市発掘調査報
告書 柏木川11遺跡 所収 恵庭市教育委員会

風張遺跡：青森県 八戸市 風張

Takehisa Kudo and A.C.D' Andrea(1991)；An Accelerator Radiocarbon Date on Rice
from the Kazahari Site. PROJECT SEEDS NEWS No.3

ですが、例えば北海道大学の構内で発掘されたサクシュコトニ川遺跡(西暦9世紀)からは、大量のオオムギとコムギが検出されただけでなく、それらの穂軸破片が大量に見つかりました。集落の一部で脱穀作業がおこなわれていた証拠になりそうなのです。こんな資料はこれまでの日本中の発掘調査の中ではどこからも知られていない。調べれば調べるほど、どの擦文時代遺跡からも栽培植物種子が見つかる。もし擦文時代の報告書で栽培植物の検出されていない遺跡があるとすれば、それは忙し過ぎてフローテーション法によるこうした種子検出作業を省略しているからだ、といってもよいでしょう。農耕器具さえも検出されています。恵庭町の柏木川遺跡で発掘された墓地からは、カマとスキが副葬されていましたし、私も札幌の北大付属植物園内の擦文時代竪穴住居から鉄製スキと共にアワやキビの炭化種子を掘った事があります。

つぎに竪穴住居の発掘で床面の炭化種子の分布を調べた興味ある例を紹介しておきましょう。この遺跡は恵庭市柏木川11遺跡で、恵庭市教育委員会が主体となって発掘したものです。時代は擦文文化の前期、西暦8世紀の最後の4半世紀。1989年に調査が実施されました。火災をうけた住居だったので、炭化した屋根材の下の床面を図のように50センチ四方のグリッドで区切り、炭化物を含む土壌を採取し処理したのです。その結果、大量のアワとキビが検出されました。それをカウントしてグリッドに落としたのです。こうした例を集めていけば、竪穴住居の中の作業スペースの復元も可能かもしれません。いかがでしょうか。こうした事例が調査の度に増加しているので、北海道の古代から中世にかけての住民は、採集狩猟民ではなくむしろ農耕に傾斜していると考えざるを得ないのです。

もし、私たちの調査事例の基づく仮説が正しいとすれば、北海道に見られたこれらの栽培植物の流入経路を、至急再検討する必要があるでしょう。ヒエは東北で栽培化されたかもしれませんが、アワの流入時期は、ひょっとすると縄文時代かもしれない。ソバはどこからはいってきたのでしょうか……。オオムギとコムギも大問題です。これは北と南の両方から、時期を違えてはいってきた可能性が考えられます。そのいずれもがヒトの動きや文化の流入と関連している。いいえ、文化そのものだと考えるべきでしょう。

[遺跡の所在と文献]

ハマナス野遺跡：北海道 茅部郡 南茅部町 字川汲

Crawford G. (1983); PAREOETHNOBOTANY OF THE KAMEDA PENINSULA, JOMON. ANTHRO-